
二人だけの基準値

みゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人だけの基準値

【Nコード】

N1124H

【作者名】

みゆ

【あらすじ】

高校生ともなると、エッチな話に花が咲きます。周りの子も次々と経験を済ませて、そしてとうとう私達も…？ この小説は『恋の基準値』番外編です。本編を読まれていなくてもわかるようなお話になっていると思いますが、本編を読まれた方が人間関係などわかりやすくなるかと思われます。

第一話 旅行の計画

「えー！マジ？」

明日香が目をキラキラさせながら、驚いたように声を上げた。その明日香の視線の先には、恥ずかしそうだけど嬉しそうに頬笑む瑞穂が座っていた。

久しぶりに三人で会う夏休みの一日。とりあえず何か食べようと入ったファーストフード店の一角で、瑞穂が話し始めたのは、彼氏である先輩と一緒にいくという旅行の予定だった。

「部活の合宿も兼ねて…って事になってるんだけど、行く人は全員恋人同士なの。一緒にマネージャーやってる利枝先輩とその彼氏の佐伯先輩、それから、佐伯先輩の親友の土屋先輩と私と同クラの彼女の美保ちゃん、それと中村先輩と私、計六人。」

「それ、親にバレたりしないの？」

「うん。うちの親、利枝先輩の事超信頼しててさ。利枝先輩が一緒なら大丈夫だろうって安心しきってる。」

「でも実際は、向こうに行ったら別行動になる訳でしょ？」

「勿論ずつとでは無いよ！一応合宿も兼ねてるんだし。でも、練習が終わったら…そうなるの、かな。」

頬を染めながらそう話す瑞穂の隣で、私はドキドキしながら二人の会話を聞いていた。

高校に入学してから正式に付き合い始めた瑞穂と中村先輩。学年が違つとあまり会えないからと、瑞穂は中村先輩が所属する陸上部のマネージャーになった。

付き合つて今月で四ヶ月目の、話を聞くところでは凄く仲の良さそうな二人。

キスは付き合つて一ヶ月でしたと聞いていた。そして今度は一緒

に旅行に行くという。しかも一緒に行くのが全員恋人同士。…ってことは、その日はもしかしたら初めての……。

「しちゃう…んだよね？」

明日香が瑞穂に顔を近付けて、じつと瑞穂を見つめた。

「…やっぱり、そうなるのかなあ……？」

自分の事を聞かれたのに、瑞穂はなんとも言えない複雑な表情をしながら明日香に問い返した。

「部屋割りにもよるけど、でも一緒に行く人達は、もうそういう事経験済みなんでしょ？だったら絶対二人ずつに分かれるよ。」

「そうなのかな…？」

「絶対そうなるって！」

「そっか…。そうだよな。」

何故か瑞穂が不安そうな声を出す。その瑞穂の声を聞いて、明日香が

「嫌なの？」

と、再び瑞穂に問いかけた。

「嫌…じゃないよ。付き合ってもう四ヶ月だし、そういう雰囲気になったこともあるし。…それに、先輩だったらいいって思う。けどやっぱり、ちょっと怖い。」

いつも強気な瑞穂がそんな風に言うなんて、よっぽど不安なんだろう。それもそうかもしれない。なんて言っただって“それ”は、赤ちゃんが出来ちゃうかもしれない行為なんだから。それに人にもよるらしいけど、初めては凄く痛いってよく聞く。そんなの、誰だっ
て不安になるよね…。

「大丈夫だよ！」

そんな不安を取り去るかのように、明日香が明るい声を出した。

「ちゃんと避妊さえすれば平気だって、クラスの子も言ってたし。

それに、本当に好きな人となら、凄く幸せな気持ちになるって。瑞穂、中村先輩の事本当に好きなんでしょ？だったら覚悟決めなきゃ

！会ったことは無いけど話では中村先輩って超優しそうだし、きつとその時も優しくしてくれるよ。」

「…そうかな？」

明日香の言葉に、瑞穂の表情が少し明るくなった。

「そっだよ！絶対大丈夫だって。」

大丈夫を繰り返す明日香を見て、瑞穂が

「そっだよね。」

と笑った。

「うん、そっだよ！…よし。そうと決まったら買い物行こう！」

瑞穂の笑顔を確認した明日香は、テーブルに置いてあったジュースを急いで飲み干すと、バッグを持って立ち上がった。

旅行の買い物でもするのかな？私はそう思いながら明日香の後を追ったけど、着いた場所は予想とは違い、可愛い下着が並んだランジェリーショップだった。

「やっぱり女の子らしくピンクかなあ。」

明日香が楽しそうに下着を物色する。その隣で瑞穂が

「でも、初めては白の方がいいんじゃないの？」

とか言いながら、少し恥ずかしそうにでも真剣に下着を手にとって眺めていた。

どうやら二人が選んでいるのは、所謂“勝負下着”らしい。初めての事だからと気合いを入れて品定めをする二人の横で、私はズラリと並んでいる下着に目を奪われていた。

実は、こういうお店に入るのは初めてだった。下着を買うのはお母さんとデパートに行った時位で、しかもいつもお母さんと一緒に選んでいるから、こんなに可愛いのは持っていない。明日香や瑞穂はいつもこういう所で買ってるのかな。そういえば体育の着替えの時などにちらっと見る明日香の下着は、いつも凄く可愛いな…。

「沙和は買わないの？」

何着かを手にして試着室へ向かおうとした瑞穂が、突然私の方を振り返った。その声にはっとして、私は

「え？買わないよ。こんなに可愛いんじゃないけど、この前お母さんと買い物に行って買って貰ったばかりだし。」

と瑞穂を見た。

瑞穂は私の答えを聞くと

「違うよ。」

と言つて、それから私に顔を近付けて、耳元で囁いた。

「普段着けるのじゃなくて特別な時に着けるのだよ。…沙和はそういう話、ないの？高瀬君とエッチしたりとか…。」

「ええ?!」

瑞穂の言葉に私は思わず大きな声を出した。その瞬間周りにいた人達が、驚いた様に私達に振り返った。その視線と瑞穂の言葉、両方が恥ずかしくて、私は赤い顔をしながら隠れるように店の隅へと向かった。その後を笑いながら明日香が追い掛けて来て、一緒にいた瑞穂に向かつて

「沙和は当分ないよ。だってもうすぐ付き合つて三ヶ月になるのに、まだキスもしてないんだもん。」

と、私が答えるよりも先に言った。

「……別にいいじゃん、してなくつたつて。」

からかうような明日香の言葉に、私は膨れながら明日香を睨んだ。でも明日香は

「それでもそろそろキス位してもいいんじゃないの？減るもんじゃないんだし。」

と、ニヤニヤしながら言葉を続けた。

高校に入って暫くしてから付き合い始めた、私と高瀬祥太君。学校が遠いし今は野球部の試合で忙しいからあまり会えないけれど、この夏休み中にきつと一日位は会えるだろう。

そりゃあ私だって、祥太君とならいいかな…とは思っけど、そんなに焦ってすることじゃないし、第一、あんまり会えないし。…そういうえば、明日香もキスの経験はあるんだよね。今は彼氏いないけど、中学の時に付き合ってた田中君と…。

「まあ、そういう事がないにしてもさ、可愛い下着着けるだけで何か女の子って気持ちになるよ。デートとかちょっと特別な日に着る用に、沙和も一枚位買ってみたら？」

「…そんなに言うなら、買う。」

そう言うのと、私は瑞穂達に背を向けて、密かに可愛いなと思っただ下着が陳列されている場所に行き、ピンクのレースとリボンが付いた白い下着と、小さな花柄の下着を手にしてレジに向かった。

選ぶだけで楽しかった。私って女の子なんだって気持ちになった。これを着たら、もっと“女の子”っていう気持ちになるかな。

祥太君にこれを見せることはまだ当分ないと思うけど、でもそれを服の下に着けた女の子な私を見て、“可愛い”って思ってくれりかな？そして今よりもっと仲良くなって、何ヶ月後かはわからないけど、いつかは私も瑞穂みたいに……。

「何ニヤニヤしてるの？」

既に関い物を終えてシヨップの袋を手を持った明日香が、私の顔を覗き込んだ。

「な、何でもないよ！」

私はそう言っ、赤くなっった顔を冷ます様に首をブンブンと振った。

瑞穂が初体験を済ませたと聞いたのは、それから数日後の、みんなで行った花火大会の時だった。

第二話 心のままに

明日香に彼氏が出来た。

相手は、明日香が高校に入学してからずっと格好いいと言っていた、バスケット部の降矢先輩。

“絶対に落とす”と言ったその台詞を実現させただけでも驚いたけど、更に驚いたのは、付き合ってから一ヶ月も経たないうちに先輩と最後までしてしまったという事だった。

「やっぱ、痛かった？」

瑞穂が頼杖を付きながら明日香に聞いた。

久しぶりに来たカラオケボックス。入室してからもう三十分が経過しているけれど、ずっと話をしていてまだ誰も一曲も歌っていない。でもそんな事は気にもせず、私達は明日香の答えをワクワクしながら待った。

「痛かったよー。」

明日香はその時の痛みを思い出したのか、やや眉を寄せてそう言った。

「そうだよね。」

それを聞いて、瑞穂が苦笑いしながら頷く。

「私も凄く痛かったもん。」

どれくらい痛いのか、経験していない私には分からない。だから本当の意味では二人の会話に入っていないかかわりなく、私はちょっと置いてかれた様な気分になりながら、目の前にあるジュースのストロークに口を付けた。

「それにしても意外だったなあ。」

瑞穂がため息混じりに明日香を見た。

「明日香は田中君とより戻すんだと思ってた。」

「そうだよね！」

私はストローから口を離し、瑞穂の言葉に賛同した。

「この前の花火大会の時だって凄く仲良さそうにしてたから、絶対そうだって私も思ってた。」

「止めてよー。」

明日香が再び眉を寄せる。

「田中とはただの友達だよ。もう関係ないって。それに、降矢先輩って田中とは比べものにならないくらい格好いいんだよ。沙和も知ってるでしょ。」

「それは…知ってるけど。」

確かに降矢先輩は格好いい。顔も勿論だけど、背も高いしバスケットも上手い。先輩の事を狙ってた女の子もいっぱいいた。

その中から明日香が彼女になるなんて、正直思っていなかった。そりゃあ明日香は友達の私から見ても可愛いけど、先輩の周りには可愛い女の子がいっぱいいたし。

「沙和、お兄ちゃんにちゃんとお礼言ってくれた？沙和のお兄ちゃんが紹介してくれたお陰で彼女になれたんだ様なものなんだから。」

「うん。」

そうなんだ。降矢先輩と明日香が付き合うことになったのは、お兄ちゃんの協力のお陰もある。

バスケット部の先輩であるお兄ちゃんに紹介を頼んでと明日香が言ったのは、確か入学して一ヶ月が経った頃。それから暫くして私はお兄ちゃんにそれを伝え、お兄ちゃんは渋りながらも降矢先輩に明日香の事を話してくれた。

その後二人は電話したりメールしたり、たまに二人で遊びに行ったりしたりして、それで明日香の事を気に入ってくれた先輩から、明日香に“付き合おう”と言ったらしい。

二人が付き合ったのはお兄ちゃんのお陰もあるけど、やっぱり明日香の行動力と明るい性格のお陰かな。

「ねえ明日香、こんな事言いたくないんだけど…本当に大丈夫？」

突然瑞穂が心配そうな顔をして明日香を見た。

「遊ばれてる訳じゃ、ないよね？」

「…大丈夫だよ。」

一瞬不安そうな顔をしたけれど、明日香はすぐに笑顔を見せて話し出した。

「確かに先輩モテるし、女の子の友達も沢山いるし…、彼女も、今まで何人かいたって、聞いた。でも毎日メールしてくれるし、それに…、初めての時も、優しかったもん。」

「大丈夫だよ！降矢先輩、遊びで女の子と付き合う様な人じゃないって、お兄ちゃんも言ってたもん。」

「そう…だよな。」

明るくしていたけれど実は不安だったのか、明日香が私の言葉を聞いてほっとした表情をした。でも瑞穂はまだ不安そうな顔をして、じっと明日香を見ていた。

「…でもさ、初めてのエッチが付き合って一週間って…。明日香にとって初めての事なのに、ちょっと早すぎない？」

「私が言ったの。」

「え…？」

「私が先輩に“しよう”って言ったの。」

「何で?!」

明日香の告白に、私達はただ驚いて明日香を凝視した。そんな私達を見て明日香は笑って、それからちよっと俯いて話し始めた。

「先輩の元カノって、凄く綺麗な人でさ。…付き合ってたんだからしょうがないけど、エッチもしてみたんだ。それ聞いたら悔しくて、何か勝てないような気がしちゃって。それで、どうすればいいんだろうって考えてて、私も先輩とすればいいんじゃないかって思ったの。だから私から言ったんだ。先輩となら、そういう事になってもいいって。先輩ちよっと驚いて、それから“本当にいいの？”って私の事心配してたけど、私が“いい”って言ったら…：…優しく、してくれた。」

明日香がそんな事を考えていたなんて知らなかった。いつも楽しそうにしていたから全然気付かなかった。

そういえば中学の時にも同じ様な事があった。確かあれは田中君と別れる前。恐らく明日香は物凄く悩んでいただろうに、いつも明るくしてて、私達に悲しい顔を見せる事はしなかった。そして一人だけで考えて、田中君と別れる事を決めたんだった。きっと明日香は今回も同じ様に、一人で考えて決めたんだろうな。

でもそれにしても自分から“しよう”って言うなんて…。明日香の行動力は知ってたけど、やっぱり凄い。

「…後悔、してない？」

瑞穂はまだ心配そうに明日香を見ている。でも

「する訳ないよ！だって、凄く好きな人だよ？」

と明日香が言うのを聞いて

「そっか。ならいい。」

と、安心した様に微笑んだ。

「あとは、沙和だけだね。」

明日香が悪戯っぽい目をして、私を見た。

「沙和もそろそろなんじゃない？」

瑞穂も笑って私を見る。

「な、何言ってるの?! そんなこと無いよっ!」

二人の言葉に、私は顔を赤くした。

「何で無いっていえるの? この間キスしたって、沙和、言ってたじゃない。」

「…た、確かにキスはしたけど、でも……。」

キスだけでもあんなにドキドキしたのに、それ以上の事なんて考えられなかった。

興味が無い訳じゃない。祥太君とならいつかは…って思いもある。でも、まだ早いというか…。

「沙和、これあげるよ。」

赤くなつて俯いていた私に、明日香が何かを差し出した。なんだろうと思ひながら受け取つてそれを見た私の顔は、更に赤くなつた。

「…これって…!」

「うん。そう。」

明日香がにっこりと笑う。

「何でこんなの持つてるの?!」

「いざという時の為にね。沙和も一つ位持つてなよ。」

「い、いらないよ!!!」

慌ててそれを返す私に、明日香は

「何で? 避妊は大事だよ?」

と真面目な顔をして言った。そんな私達を見て、瑞穂が可笑しそうに笑つた。

家に帰つて、宿題をやるうと鞆を開けた私は、赤い顔をして固まつた。

明日香に返したはずの“アレ”が、何故か鞆の中に入つていた。しかも二つも。

一体いつの間に入れたの?! 私は焦つて辺りを見回した。

どうしよう…。こんなの持つてるのバレたら、お母さんに何て言われるか。

ゴミ箱に捨てたら、絶対見つかる。かといって机の中にいれても、たまにハサミやペンを勝手に持つていくお兄ちゃんに見つかつてしまつかもしれない。

その時私の目の端に、クローゼットの前に置かれたお気に入りのバッグが映つた。私はそれを手に取ると、フアスナーが付いている内ポケットに明日香から渡されたものを入れて、誰にも見られないうちにと急いでクローゼットの奥に押し込んだ。

流石に誰もクローゼットは開けないだろう。もし開けたとしても

私のバッグを使う人は誰もいないから、きつと気付かれない。

そうして奥に押し込まれた、お気に入りのバッグとその中に入っているモノ。

一ヶ月も経つと、私はその存在をすっかり忘れてしまっていた。

第三話 誘い

「え、駄目なの…?」

冬休みに入り数日が経った十二月三十日の夜、祥太君から電話があった。話の内容は明後日に迫ったお正月の事。だいぶ前から一緒に初詣に行く事を約束していたのに、それが駄目になったというのだ。

「ごめん…どうしても家族と過ごさないといけなくて。」

「少しでも駄目なの?」

「うん、多分…。」

実家から離れた場所に住んでる祥太君が家族と過ごすのは、きつと久しぶりの事だろう。彼のお父さんやお母さん、そしてお姉さんや妹さんだつて、祥太君と一緒に過ごせるこの日を楽しみにしていた筈だ。

頭ではわかっているのに悲しかった。私だつて祥太君と会えるのを、凄く楽しみにしていたから。

普段はゆつくり会えないけど、その日は一緒にいられるんだつて、ずっと前から思ってた。それを信じてクリスマスだつて我慢したのに、まさか会えないなんて…。

「…分かった。」

そんな事を言ってもきつとどうにもならないからと、私は渋々祥太君の申し出を了承した。でもせつかくの休みなのに、ずっと会えないなんて絶対に嫌!

「じゃあ他の日は?祥太君いつ寮に帰るの?それまでに会える?」

私がそう尋ねると、祥太君は少し間を置いた後

「あのさ…。」

と、ちよつと擦れた声を出した。それがあまりにも言いづらそうに聞こえたので、もしかしたら駄目だと言われるのかもしれないと、私は更に悲しくなった。でもその後続いた祥太君の言葉は私が考

えていたものではなく

「二日…しあさつてさ、家族みんな親戚の所に行くらしくて…。家に誰もいないんだけど、来ない…?」
という誘いの言葉だった。

「絶対そうだって!」

電話から確信に満ちた瑞穂の声が聞こえる。

祥太君との電話を切った後、私は瑞穂に電話をして、初詣に行かなくなつた事や代わりに家に誘われた事を話した。すると瑞穂は『付き合つてる二人が誰もいない家において何も無い筈がない、だから彼はその日初めてのエッチをするつもりなんだ』と興奮ぎみに言つた。

「…そうなの?」

「間違いないよ。じゃなきゃわざわざ“誰もいない”なんて言つたりしないって。そう言つたのはきつと、高瀬君なりの沙和への予告なんだよ。」

「で、でも、ただ誰もいないって言われただけでそう決めつけるのは…。もしかしたら私が気を遣わない為に言つただけなのかもしれないし…。」

「じゃあ何で家なの?デートなんてどこでも出来るのに、何でわざわざ誰もいない家に誘つたりするの?」

「それは…。」

理由なんてわからない。さっきの電話で祥太君は何も言わなかったから。確かに瑞穂の言う事も一理ある様な気はする。けれど、本当に彼がそういう事をするつもりでいるのかどうか…。

「明日香には話したの？」

「ううん、電話はしたんだけど出なくて…。多分降矢先輩と一緒にいるんだと思う。」

「そっか。でも明日香も同じ事言うと思うよ。だって沙和達、付き合ってもう半年以上経つんだもん。そうなってもおかしくないって。」

色んな思いが頭の中を巡って何も言えなくなった。それに気付いた瑞穂に

「嫌なの？」

と心配そうな声で訊かれて、私は暫く考えた後、携帯電話を耳に当てたまま小さく首を振った。

嫌…な訳ではない。むしろ祥太君とだったらいつかはって、密かに思っていたのだから。でも…………。

「そんな事はないけど…。でも、もし違ってたらどうするの？私だけ期待してたみたいで恥ずかしいじゃん。」

「もし違ってたとしたって、準備は絶対していくべきだよ。逆に何にも準備しないでそうなったら、恥ずかしいのは沙和だよ。」

「…そうだけど。」

「いいから！可愛い格好していきなつて。下着とか、可愛いのあるでしょ？」

「う、うん…、前に瑞穂達と一緒に買い物行った時に買ったのが…。」

「じゃあそれ着けて行くんだよ。それと、念の為、生理用品持ってた方がいいよ。」

「何で？」

「何でって、多分初めての時って、血が出ると思うから。」

「え…?!」

そういえば瑞穂も明日香も言ってたし、既に経験を済ませたクラスの子も言っていた。…やっぱり血が出る程の事なんだし、その時つてきつと。。。

「痛い、んだよね…？」

不安になつて尋ねた私の言葉に

「それは個人差のある事だから、沙和がそうかは分からないけど。」
と瑞穂が妙に冷静に答えた。

「…そう、だよな。」

「まあ私は痛かったし、明日香もそうだって言ってたけど。」

「………そっか…。」

「大丈夫、例え痛くても何とかなるって。だって好きな人となんだから。そんなに怖がる事ないよ。」

「…うん。」

いつかはそういう日が来るんだって、ずっと思ってた。瑞穂も明日香もしてるんだし…って。

でもそれが現実になるかと思うと、やっぱりちょっと怖い。痛いっていうのもそうだけど、それをしたら私はどうなっちゃうんだろ…って…。

「何とかなるよ。」

瑞穂が明るい声で私に言った。それは既に経験したという余裕からくるものなのかもしれない。

「でも、嫌な事はちゃんと嫌って言いなよ。…まあ、言葉は選んだ方がいいとは思っけど。」

「うん…。」

「とにかく、私達には何もしてあげられないんだから、あとは沙和次第だよ。覚悟決めて頑張りなつて！あ、でも、初めての事なんだし、後悔だけはしないようにね。」

「うん…。」

「じゃあ、報告待つてるね。」

「え…？…！」

「楽しみにしてるから。」

瑞穂はそう言つと、本当に楽しそうな声で

「じゃあね。」

と告げて、電話を切った。

明け方のまだ薄暗い部屋。家族の誰もはまだ寝ているに違いない。私はベッドから起き上がりバスタオルを持つと、みんなを起こさない様に静かに歩きバスルームへと向かった。

昨夜は良く寝れなかった。そして早く起きてしまった。どうしてなのか：その理由はわかつてる。それは今日が一月二日 誰もいない祥太君の家に行くこと約束した日だから。

どんなに熱いシャワーを浴びても、念入りに体を洗っても、気持ちには全然すっきりしない。今日起こるであろう事を考えて不安になつたりドキドキしたり：その繰り返し。

シャワーを止めたため息を吐くと、ふと鏡に映った自分の姿が目に入った。私は真冬の寒さも忘れ、その姿をじつと見つめた。

決して大きいとは言えない胸、縊れのないウエスト お世辞にもスタイルがいいとは言えない私の体。

こんな体でもちゃんと“女性”に見えるだろうか。祥太君はそれでもいいと思つてくれるのだろうか…。

不安になりながら服を着て部屋に戻ろうと扉を開けると、ちょうどお兄ちゃんが階段から降りて来て、私はどくと心臓を跳ね上げさせた。

どうしてバスルームに居たのか、そう訊かれたらどうしようとかドキした。しかもみんなに気付かれない様なこんな早い時間に。

でもお兄ちゃんは大して気にする風でもなく、眠そうな目でちらちらと私を見ると

「もう起きてんのか…。」

とだけ言って、トイレに向かつて足を進めた。それを見た私はほとと胸を撫で下ろして部屋に向かおうとしたけれど、ふとある事に気が付いてお兄ちゃんに視線を向けた。

そういえばお兄ちゃんって、結構女の子に人気があったな。あれだけモテていれば、付き合った人も一人や二人いただろう。もうすぐ大学生になるんだし、きっとエッチな事も経験してて…女の子の裸だって見た事があるだろう。その人達ってどんな体してたのかな？やっぱりスタイル良かったのかな？それと比べて…私の体ってどうなのかな…？

「…なんだよ。」

私の視線に気が付いて、お兄ちゃんが不機嫌そうに振り向いた。それに驚いて思わず考えていた事を口にしそうになったけれど、でも流石に“私の体どう？”なんて聞く事は出来なくて、私は

「何でもない！」

と慌てて首を振ると、階段を駆け上がり自分の部屋に向かった。

第四話 緊張

ほとんど人通りのない静かな住宅街。以前一度だけ利用した事がある停留所でバスから降りると、私はドキドキしながらゆっくりと足を進めた。

家を出る前に掛かってきた電話で、祥太君は

「途中まで迎えに行く。」

と私に言った。でも私は彼に会う前に少しでも気持ちの整理をしておきたくて、その申し出を断り一人で彼の家に向かう事にした。

でも祥太君の家に近付くにつれ、心臓の鼓動は大きくなり、緊張感が増してくる。とてもじゃないけど気持ちの整理なんてする事が出来ない。そんな事を考えている間にかかなりの距離を歩いていたいので、気が付くと祥太君の家はすぐ目の前になっていた。

暫くその場で立ちすくんでいた私は、覚悟を決める様に大きく息を吸って、震える手で玄関のチャイムを鳴らした。すると数秒後にドアが開かれ、中からスウェット姿の祥太君が顔を覗かせた。

「あ…えっと、明けましておめでとう。」

彼に会った時まず何を言えいいのかずっと考えていたんだけど、とりあえず新年の挨拶はしなければいけないと、私は冷静を装ってそう告げた。すると祥太君も

「おめでとう。」

と私に返し、それから

「外、寒かった？顔赤い。」

と言って私を見た。

きつと顔が赤いのは寒さの所為だけじゃない。だから私は咄嗟に両手でほっぺを隠したけれど、でも正直に言うのは恥ずかしいからそういう事におこうと

「うん…。寒かった。」

と言って頷いた。

「早く中入りなよ。」

祥太君に促されて玄關に入ると、家の中はしん…と静まり返っていた。…家の人、本当に誰も居ないんだ。

「何か温かいもの持ってくるから、先に俺の部屋行って。」

祥太君がそう言うて私に背中を向けようとした。確かに外が寒くて温かいものを飲みたい気分だったけど、手間を掛けさせるのは悪い気がして

「え、いいよ別に…。」

と一歩彼に近付いた。その瞬間、祥太君からふわりと石鹸のいい香りがしてきて、私は何も言えずそこから動けなくなってしまった。

…祥太君、もしかしてお風呂に入ってた…？それって…これからするかもしれない事の為に…？

突然動かなくなった私を不思議に思ったのか、祥太君が

「どうかした？」

と言って私の顔を覗き込んだ。その距離が物凄く近い様な気がして私はドキリと心臓を高鳴らせ一歩後ろに下がった。そして

「うっん、何でもない…！えっと…じゃあ、私先に祥太君の部屋行ってるね。」

と言うと、慌てて階段を駆け上がった。

二度目となる祥太君の部屋の中で、私はそわそわしながら辺りを見回していた。前にこの部屋に入ったのは夏の…初めて祥太君と唇を交わした日。そして今日はこの場所で、それ以上の事をしちゃうかもしれないんだ…。

緊張のあまり大きく息を吐いた瞬間、携帯電話の受信音が鳴った。突然の事に私はビクツと肩を震わせ、ドキドキしながら携帯電話を手を取った。

メールの送り主は明日香だった。件名に『頑張って』と記されたその中身は『今日するんでしょ？頑張って！もう高瀬君の家着いたの？』というものだった。

祥太君から家に誘われたあの日から、私は明日香と『明けましておめでとう』メールをしただけで、結局祥太君の事を言わないままだった。なのに今日祥太君の家に来ているのを知っているという事は、きつと瑞穂が明日香に言ったのだろう。

『するかどうかなんてまだわからないし…。』そうメールを打って、私は明日香に送信した。その直後『絶対するって！でもあんまり緊張しすぎないようにね。』とメールが返って来て、私は画面を見つめたままハアツと息を吐いた。

緊張するなと言われてもそんなの不可能だ。もう既にこの場に居たたまれない様な気持ちになっているというのに。

『どうしよう…。どうすればいいのかわからないよ。明日香は初めての時どうしたの？祥太君の言う通りにしてあげばいいのかな？』そう打ちかけた時、部屋のドアが開いて祥太君が入って来た。私は慌てて携帯電話をバッグに入れると

「はい。」

と言って渡されたマグカップを受け取り、その中身を一口飲んだ。

マグカップの中身は、ミルクの入った紅茶だった。その温かさとおいしい甘さが、さっきまで寒さに曝されていた私の体をふんわりと暖めてくれる。でも緊張した気持ちは解ける事が無く、私は祥太君に

「ありがとう。」

とお礼だけ言うと、黙ってマグカップの中を見つめた。

私の緊張が伝わったのか、祥太君も何も言わない。その静まり返った部屋の空気が、私の緊張を更に高まらせていく。

沈黙に耐え切れずふと顔を上げた私の目に、本棚に並んだ読みかけのマンガ本が映った。何かしていれば気が紛れるかも…。そう思っ
「あの、この前途中まで読んだマンガの続き、見てもいい？」

と、その場から立ち上がろうとした。でも、立ち上がる事は出来なかった。祥太君の手が私の腕を掴んだから。

「え……。」

驚いて振り返ると、祥太君は私から目を逸らして顔を俯けた。でも彼の手は私の腕を掴んだままだった。いつもは温かい彼の手が、何故か妙に冷たい。

「あの……どうしたの……？」

煩い程の鼓動を聞きながら、私は祥太君にそう尋ねた。黙ってなんていられなかった。だって黙っていたら心臓が壊れちゃいそうだったから。

私の問い掛けを聞いても、祥太君は何も言わなかった。暫く黙ったままで、何かを考える様な素振りをしていた。でも少ししてから大きく息を吐くと

「気付いてるかもしれないけど……。」

と呟いて、ゆっくりと顔を上げた。そして真っ直ぐに私を見つめると、今度ははっきりと聞こえる様な声で私に告げた。

「俺、沙和としたい。」

……どうしよう！

祥太君の声に、私は半分パニックに陥った。

覚悟して来た筈なのに、冷静ではいられなかった。本当にするんだ……そう思うと、泣きそうな気持ちになった。

……でも嫌な訳じゃない。もし嫌だったら、今日ここには来ていないだろう。今私がここに居るのは、祥太君とならそうなくてもいいと思っただから。

私はぎゅつと目を瞑った。祥太君の顔がどうしても見れなかった。「……嫌？」

少し擦れた祥太君の声が聞こえた。私は黙ったまま、その問い掛

けに対して小さく首を振った。

これでもう後戻りは出来ない。『嫌?』と訊かれて首を振るのは、受け入れたのと同じ事だから。

「本当に…? いいの?」

それでも彼はそう尋ねた。私は唇を噛みながら目を開けると、上目遣いに祥太君を見つめ、小さくコクリと頷いた。

祥太君の手が私の腕から離れ、ゆっくりと顔に近付いて来る。でもその手は私の顔に触れる事はなく、代わりにそつと髪の毛に触れた。

「もし…嫌なら言つて。」

その声に、祥太君も本当は不安なのかもしれないと、私は思った。そうじゃなかったらこんなにも何回も確認したりしない。

「…大丈夫。」

私は必死で笑顔を作ると、祥太君に顔を向けた。じつと私を見つめる祥太君の目が私の知らない男の人みたいで、何だか少し怖い。でも祥太君となら…。祥太君とだったら…きつと大丈夫。

ゆっくりと彼の顔が近付いて来た。それに気が付いて、私はぎゅつと瞼を閉じた。

次の瞬間、二人の唇が重なった。

第五話 同じように

祥太君の手が、いつの間にか私の服に触れていた。彼が何をしようとしているのか。その位私にもわかる。

教室で回し読みしているちよつとエッチなマンガでは、ほとんどが当たり前の様に男子に服を脱がされていた。でも一枚一枚脱がされていく緊張感に耐えられる気がしなくて、私は

「自分で脱ぐから…！」

と言つて祥太君から離れた。

「…見ないでね。」

今から嫌でも全てを見せるというのに、思わずそんな事を口走しても祥太君は

「わかった。」

と頷き、私から目を逸らして背中を向けた。その優しさがちよつと嬉しい。

震える手で服を脱いでいると、どこまで脱げばいいのかという疑問が湧いた。…結局は裸になるんだから全部脱ぐべきなのかもしれない。でもせつかく可愛い下着を着けて来たし、始めから裸を見られるのは恥ずかしいし…。

そんな事をグルグル考えていると、後ろから

「…もついい？」

という祥太君の声が聞こえた。私は焦つて下着だけを着けた格好でベッドに潜り込むと

「うん…。」

と言つて祥太君に背中を向けた。

姿は見えないけど、祥太君が近付いて来るのがわかる。そして背中に触れた感触で、祥太君も服を脱いでいるという事も。

「沙和。」

名前を呼ばれて、私は体を強ばらせながら祥太君の方に顔を向けた。すると祥太君は私に顔を近付け、再び唇を重ねた。

さつきよりも うっん、今までした事のない長いキス。触れている唇から、肌から緊張がばれてしまいそうに恥ずかしい。

唇を離すと、祥太君は私を仰向けにして、じつと胸元を見つめた。これから起こる事に恐怖に似た気持ちを感じて、私はぎゅっと目を瞑った。

「あの…さ。」

その時、少し言いづらそうに祥太君が声を出した。

「…これも外して貰っていい？」

『これ』と言われた物が一体何なのか、一瞬私にはわからなかった。でも恐る恐る目を開けて祥太君を見ると、彼がさつきと同じ様に胸元を見ているのが目に映って、それが何なのかを理解した。

…これを外せば小さな胸が顕になってしまふ。でも彼がそう言うのなら、外すべきなのかもしれない。…せっかく可愛い下着を着けて来たのに、あんまり意味なかったな…。

色んな感情を抱きながら、私は震える手でブラジャーを外した。

顕になった胸が恥ずかしくて、思わず隠す様に腕を組む。でも祥太君に

「…見せて。」

と腕を掴まれ、私は戸惑いながらも言われるがままに腕を離れた。

祥太君の手が私の胸に触れる。緊張して恥ずかしくて、私は再びぎゅっと目を瞑った。

何も考えられなかった。祥太君の手が私に触れている事はわかるけど、それよりも大きく鼓動する心臓が苦しくて…。

そういう所を触られたら、普通の女の子なら『気持ちいい』と思うのかもしれない。でも私にはそれがわからなかった。祥太君の手がそこにある。その事実しかわからなかった。

その時、胸を触っていた祥太君の手がショーツの中に伸びた。その瞬間、私は痛みに似た刺激を感じて、ビクツと体を震わせた。

それは今までに感じた事のない、体に電流が走った様な刺激。祥太君の指がそこに触れる度に、その刺激が繰り返される。

「嫌…！」

どうしても耐えられなくて、私は祥太君の体を押し退け、彼から逃れる様に体を丸めた。思わず取ってしまった自分の行動に気が付いて、祥太君の顔をはっと見ると、彼は一瞬驚いた顔をして、それから目を伏せて私に背中を向けた。

どうしよう…！

私は動揺しながら祥太君を見つめた。

もしかして、嫌われた…？

その真意はわからないけど、誤解された事はわかる。それを裏付ける様に祥太君が低い声で

「…嫌なら、最初から言えばいいのに…。」
と呟いた。

「違うの！」

彼の誤解を解きたくて、私は焦りながら大きな声を出した。

「そうじゃなくて、痛くて…。」

その時、瑞穂の声が頭を過った。『言葉は選んだ方がいいけど…』
という声が。

何て言えば伝わるのか、私にはわからない。でもこれ以上祥太君に誤解される様な事は言えない…。

「…人の話を聞くとね、みんな胸とか…触られたら気持ちいいって言うって…。でも私はそう思わなくて…。」

…こんなんじや駄目だ。これじゃあ祥太君が悪い様にも聞こえる。どう言えばいいのかと思った時、何故かするりと言葉が出た。それは凄く正直な言葉。さっき私が感じた“不安”だった。

「…きつと私の体がおかしいの。だってみんな気持ちいいって言う

のに私にはそれがわからなくて…。好きな人に触れられてるのに、
こんなの絶対おかしいよ…。」

改めてそれを口にしたら感情的になってしまい、涙が溢れて流れ
落ちた。

「だから、私が悪いの。嫌な気持ちにさせてごめんなさい…。」

祥太君が私の方に振り返った。きつと泣いている事に気付いたの
だろう。でもこんな時に泣くなんて、私ってズルい。泣いて許して
もらうなんて間違ってる…！

私は涙を拭くと、祥太君の目をじつと見た。祥太君も私の顔を見
てくれている。…今なら誤解を解けるかもしれない。正直な気持ち
を言えばきつと。

「私、祥太君とするの嫌なんて思ってた。それどころか祥太君と
ならいいってずっと思ってた。…私の体、おかしいかもしれないけ
ど…お願いだから止めないで…。」

祥太君の表情が少し変わった。そして今の言葉が嘘でない事を確
認するかの様に、じつと私の目を見つめた。

「…本当に？」

彼の問い掛けに、私はコクリと頷いた。それでもまだ信じてもら
えていない気がして、私はどうすればいいか考えた。そして思いつ
いたそれは凄く恥ずかしい事だったけれど、それで祥太君が信用し
てくれるならするしかないと思い　私は初めて自分から、祥太君
にキスをした。

唇を離すと、祥太君は驚いた様に私を見つめていた。その視線に
自分が凄く大胆な事をした気になって、私は赤くなって俯いた。で
も祥太君はまだ私を信じてくれていないかもしれない。そう思って、
ドキドキしながら顔を上げて

「…まだ、疑ってる？」

と彼に問い掛けた。

「いや、そんな事はないけど…本当にいいの？」

『そんな事ない』と言いながら、まだちょっと疑ってるじゃん…。
恥ずかしい事をした後で気が大きくなっていたのか、私は
「信じてない…。」

と上目遣いに祥太君を睨んで、唇を尖らせた。

「違うって。ただ…俺、沙和の気持ち考えずに突っ走っちゃったよ
なって…。」

「そんな事ないってば。私だって祥太君とならいいって思ってたっ
て、さっき言ったでしょ？」

ふつと祥太君が笑った。彼が本当に信じてくれたみたいで、私は
ほっとした。でも祥太君は次の瞬間真面目な顔になって、そしてふ
つと顔を俯けた。仲直り出来たと思っただのに何故…？と不安になり
祥太君を見つめると、彼はちよつと言いつらそうに

「あの、俺も…こういう事初めてで、正直どうしたらいいかわから
なくて…。だから沙和の体がおかしいとか…そういうのはないと思
う。気持ちよくさせられなくてごめん。」

と謝った。

「え…。」

思わぬ謝罪に、胸がドキドキと高鳴った。そしてとても嬉しくな
った。

きつと私達同じだったんだ。二人共同じ様に不安な気持ちだった
んだ。

「…だから、痛いとかあったら正直に言って。なるべくそうしない
様に努力するけど…。」

「うん、分かった…！」

私は祥太君抱きつくと、再び自分からキスをした。

第六話 熱の行方

一度気持ちを開放した所為か、緊張感が和らいだ。そしたら妙に安心して、今までわからなかった事を感じる余裕が出来た。

ぎゅっと抱き締められた体に、祥太君の鼓動が伝わってくる。それはとても力強く速い鼓動で、ああ祥太君もドキドキしてくれてるんだと思うと、なんだか嬉しかった。

祥太君は再び唇を重ねると、私をそつとベッドに寝かせた。そして自分の体を下にずらして、唇を私の首筋に這わした。

そんな所にキスされるなんて初めてで、カアツと顔が熱くなった。しかもその感触がくすぐったい様なそうでない様な、今まで感じた事のないもので…。もしかしたらこれが“気持ちいい”って事なのかな。祥太君の唇の柔らかさを感じながら、私はぼんやりと考えていた。

首筋に触れていた唇はだんだんと下って行き、それはやがて私の胸へと到達した。いつの間にか彼の両手もそこにあり、胸を優しく包んでいる。まるで遊ぶかの様に谷間や膨らみにキスをしていた唇は、既に胸の天辺近くにあって、そこをそつと指で触れた後、優しくちゅつと吸い付いた。

その瞬間、私の体はびくりと揺れて、聞いた事のない声が口から漏れた。初めて聞くその声にびっくりして恥ずかしくて、両手で顔を覆う私に、祥太君は

「気持ちいいの？」

と、意地悪な質問を投げ掛けた。

例えそうだったとしても、恥ずかしくてそんな事言えない…！もう既にいっぱいいっぱいなのに。

でも祥太君はそんな私を許してはくれず

「…教えてよ。」

と更に私に問い掛けた。

「教えてくれないと、わからない。」

それは純粹な疑問なのか、それとも意地悪で言っているのか。彼の顔すら見れない私には、祥太君の気持ち判断出来ない。けれど、言わないとわからないって、確かにそれはそうかもしれない…。

言葉にする事はどうしても出来なくて、私は両手で顔を覆ったまま、小さくコクリと頷いた。それが精一杯だった。お願いだからこれで許して欲しい…！

「ねえ、顔見せて。」

祥太君が私の手を優しく掴んだ。抵抗しようと思ったけど何故か出来ず、手は簡単に外された。自分の顔が真っ赤なのが嫌でもわかる。恥ずかしくて目が開けられない。

ふっと祥太君が笑った様な気がした。何故？って思って、確認する為に少しだけ目を開けると、祥太君は鋭い視線を私に向けて

「沙和、すげえ可愛い…。」
と口角を上げた。

今までそんな事一度も言った事なかったのに、何で今この状況で言うの？！しかもそんな意地悪そうな目をして…。普段だったら“可愛い”と言われたら嬉しいけど、今はそんな事言われても恥ずかしいだけだよ…！

「もう…！そういう事言わないでよ…！」

私は赤い顔のまま、涙目で祥太君を睨んだ。

「祥太君…今日意地悪だよ。」

「何で？意地悪なんてしてないじゃん。」

「意地悪だよ。恥ずかしい事いっぱい言うし…。」

「恥ずかしい事って？」

「……全部！」

祥太君は私の答えを聞くと、困った様に目を泳がせた。私にしてみたら意地悪な質問だったけど、祥太君はそんなつもりじゃなかったのかな…？

「…わかった。」

暫く無言でいた祥太君がぼつりと呟いた。

「じゃあ…もう言わない。」

「本当に？」

それを聞いてほつとしたけど、また彼の機嫌が悪くなっていないかと心配になり、私はじつと祥太君の顔を見つめた。すると祥太君も私を見つめ返してきて

「…でもその代わり、正直に声、聞かせて。沙和が気持ちいいのかどうか、それで判断するから。」
と、再び胸に唇を当てた。

戸惑う暇もないうちに与えられた気持ち良さに、自然とため息に似た声が漏れた。恥ずかしくて声を抑えようとしたけれど、『正直に聞かせて』と言われた手前そういう訳にもいかず、私は口元に当てていた手を迷いながら外して、かわりに祥太君の腕に触れた。

体がどんどん熱くなつて、頭の中がクラクラしてくる。祥太君の熱い息を感じる度に、私の口から吐息が漏れる。

暫くそんな状態に翻弄されていると、モゾモゾする様な熱が下半身に宿った。シヨーツの中が少し気持ち悪い。

そこがどんな状態になっているのか…確認しなくても何となくわかった。性的な興奮を感じると女の人はそうなるって聞いてたけど、私の体もそんな風になるんだ…。

かあつと顔を熱くした瞬間、祥太君の手がシヨーツの中に伸びた。そしてさつき私が痛みに似た刺激を感じた場所を、そつと指で撫でた。

ビクンツと体が跳ねた。でもそれは痛いからじゃなかった。ヌルリと触れる祥太君の指が、胸とは違う気持ち良さを私に与えた。

「や…っ…、駄目…！」

どうにかなつてしまっそうで、私は思わずそう言つて、彼の手を押し退けようとした。すると祥太君はピタリと動きを止めて

「…痛い？」

と心配そうに私の顔を見た。

「…ううん…痛くは、ない。けど…。」
「けど？」

「何か変なの…。だから…。」
うまく言葉に出来なかった。何を言ってもいやらしく聞こえる様な気がして。

すると祥太君はふつと笑い、今まで触れていた場所より少し下に指を進め

「ねえ、わかる？」
と私を見た。

「な、何が…？」

「ここ…凄いや。沙和もこんな風になるんだ。」

恥ずかしくて泣きたい気持ちになりながら、私は祥太君を睨み付けた。

「…そういう事言わないって、さっき言ったのに…！」

「ごめん。でも…嬉しくて。」

「…何が…？」

「だってこれ…沙和が俺で気持ち良くなってくれてるって証拠でしょ？」

そう言つと祥太君はショーツに手を掛けて、唯一私の体を隠していたそれを取り去った。そして私が駄目と言ったにも関わらず、同じ場所を繰り返し返しなぞったり、やがて彼のものが入るであろう場所に指を差し入れたりした。

その度に私は何も考えられなくなっていき 頭の中が真っ白になった。

暫くして、祥太君の手が私から離れた。薄らと目を開けて祥太を見ると、彼は苦しそうな顔をして

「…ごめん…もう無理…。」

と大きく息を吐き、じつと私を見つめた。

「沙和…入れていい…？」

どくんつと心臓が鳴った。遂にその時が来たんだ。

嫌なんて言えなかった。ちよつと怖いけど、そうなる事を望んでいたから。

私は握った手を口元に当てて、小さくこくと頷いた。そして私が頷いたのを確認してベッドから離れた祥太君の背中を、目でぼんやりと追い掛けた。

体から彼の手が離れた為か、熱が少し和らいだ。すると急に不安が襲ってきて、私はぎゅつと目を瞑った。

…やっぱり痛いのだろうか。それって、どれ位だろう。個人差があるって瑞穂は言ってたけど、でも彼女はどれ位痛かったのか聞いておけば良かった…。

ギシツとベッドが沈んで、祥太君がそこに腰を掛けた事がわかった。

どうしよう…きつと、もうすぐ来る……！

物凄い勢いの心臓の音を聞きながら、私は体を強ばらせその時を待った。でも何故か、祥太君はそこから動かなかった。

…どうしたのかな？

瞑っていた目を開けて祥太君が居るであろう方向を見ると、そこには、全く動かず俯き加減で座る彼の背中があった。

私がいる位置からでは祥太君の表情はわからない。勿論、どうして彼が俯いているのかという理由も。

ドキドキしながら背中に近付き

「…祥太君？」

と声を掛けると、それに反応して彼の肩がピクリと揺れた。でもその視線は私の方には向かず、やや下の方にひたすら向けられていた。何を見ているのか不思議に思い彼の顔を覗き込むと、どうやらそ

の視線は彼の手の方に注がれている様だった。

彼の下半身を見ないように慎重にそちらに視線を向けると、まずベッドに置かれている小さな四角いパッケージが目に入った。そこから更に視線を動かすと、彼の右の手のひらに、びろんと伸びた半透明の物体があるのが見えた。

最終話 好きってこと

祥太君の手の中にある半透明の物体。それが何であるのか、パツケージに入った状態でしか見た事がない私にも、何となくわかった。それはきつと、祥太君が赤ちゃんを作らない為に着けようとしていたもの。でも何故それが、びろんと伸びた状態で彼の手の中にあるのだろうか……。

「…祥太君？」

私は、黙ったまま俯く彼に、再び声を掛けた。すると祥太君は私に背中を向けたまま

「…ごめん…俺…。」

とポツリと謝った。

「え？」

何を謝られたのかわからなくて、不思議に思いながらの顔を見たけれど、祥太君はまた何も言わなくなり、手の中のものをじっと見ていた。

彼は暫くそのままだった。でも少ししてから、私に視線を向けないままで漸く口を開き

「俺…今まで着けた事なかったから、上手く着けられなくて……。先輩から貰ったの、これ一つしかないし……。だから今日は……。。」と呟く様に言った。

ああ、そうか。だから謝ったんだ。こんな悲しそうな背中をして。そのの着け方なんて知らなかった私は、彼の言葉でやっと状況を理解した。でも何て答えればいいのかわからなくて、彼の背中を見ながら考えた。

祥太君、本当はしたいんだらうな。でももう“それ”が無いから、必死で我慢してるんだらうな。

怖くて絶対に『うん』とは言えないけれど、何も着けずにするという選択肢もある。でも彼はそうしなかった。それは自分の為にと

いうのもあるだろうけど、それよりもきつと私の体の事を考えてくれたから。

そう思ったら嬉しくて、同時に彼が凄く愛しくなった。こんな悲しそうな背中をする彼を何とかしてあげたい。でも一体どうやって？ 恥ずかしいけど、今からお店に買いに行く…？

「…あ！」

その時脳裏に、夏の終わりのある日にあつた出来事がふと蘇った。私は立ち上がり、体を隠す為の毛布をズルズルと引きずりながら、ベッドから少し離れた場所へと向かった。

あの日明日香が無理矢理私にくれたもの。捨てる事も出来ずに咄嗟にしまい込んだもの。それは確か、このバッグの中に…。

「…あつた。」

内ポケットに隠されていた二つのものを手にすると、私はベッドに座っている祥太君に差し出した。

「これ、あげる。」

「…何で…？」

私の手の中にあるものを見た祥太君が、驚いた様に顔を上げた。どうしてそんな顔をするのかと疑問に思っただけで考えると、その理由にはつと気が付き、私は顔を赤くした。

きつと祥太君はどうして私がこんなものを持つてるのかと、驚いたんだ。まだ経験の無い筈の私がかんなの持つてるなんて、まるで実は経験があつて他の人と使ったか、それともこうなる事を物凄く期待してみたみたい…！

「あ、あの違うの！これは、明日香がくれて…！私はいらないって言ったんだけど、その、無理矢理バッグに入れられて…。」

慌てて弁解する私を見て、祥太君が笑った。そして私の前に手を差し出すと

「貰つて…いい？」

と恥ずかしそうに言った。

「え？う、うん。」

「まさか沙和がこんなの持つてるなんて思わなかった。」

「だからそれは、明日香から貰って…。あ、明日香にお礼言わなくちゃ。役にたったよって。」

「言わなくていいから。」

祥太君はそう言ったけれど、やっぱり明日香に言いたい。祥太君にばれない様に、こそつと言おうかな。

「絶対言わないで。」

まるで私の考えていた事がわかったみたいだ。祥太君はそう言うとお貞腐れた様な顔をして、チラリと私を睨んだ。

暫くベッドの隅で毛布に包まっていると、祥太君がこちらに向いて私に近寄って来た。

今度は上手く着けられたのかな…？思わず視線が彼の下半身に向きそうになった。でも私は慌てて目を閉じて、無言で近付いて来た祥太君の唇を受けた。

祥太君は私の体に再び熱を宿すと、今まで指で触れていた部分に違うものを当てた。そしてそれをぬるぬると何度か彷徨わせてから、私の中に侵入した。

「痛…っ…！」

裂ける様な痛みを感じて、私はぎゅっと目を瞑り毛布を握り締めた。

「大丈夫？」

祥太君はそう私に訊いたけど、止めてくれる気配はない。それどころか少しずつ、奥へと侵入して来る。

今更止めると言う訳にもいかず必死で痛みを堪えていると

「……やべえ…。」

と言う祥太君の声が聞こえて、私は涙ぐんだ目を薄らと開けた。

そこには私の知らない顔をした祥太君がいた。熱い息を何度も吐きながら。

「…気持ちいいの？」

私の問い掛けに、祥太君は

「…想像以上に…気持ちいい。」

と、ため息に近い声を出した。

私で気持ち良くなってくれるの…？凄く…嬉しい。

祥太君が私に口付けた。その瞬間私の目から涙が零れた。

「ごめん…！そんなに痛いのか？」

そう言っただけで慌てて様な目をする祥太君を見て、私は黙って首を振った。

確かに痛いけど、涙の理由はそれじゃない。祥太君の言葉を聞いた瞬間、何だか胸がきゅうつととなつて…。嬉しいんだけど切ない様な…こんな気持ちを『幸せ』って言うのかな？

「祥太君…ぎゅってして。」

そう言っただけで私は、彼に向かって腕を伸ばした。それに気が付いた祥太君の体が私にぴったりとくっついて、そして逞しい腕で私をぎゅっと抱き締めた。

「…好き。」

彼の耳元で私はそう呟いた。でも一度だけじゃ言い足りなくて、もう一度

「祥太君、好き。」

と呟くと、彼は少しだけ体を浮かせて

「…俺も。沙和が好きだよ。」

と私を見つめた。

初めて聞く彼の告白に、再び涙が流れ落ちた。また彼に心配させたくないから私は慌てて涙を拭い

「会えなくても我慢するから、ずっと一緒に居てね。」

と微笑んだ。

「うん。…沙和こそ、離れてるからって他の奴好きになっただけでいい。」

「ならないよ。私には祥太君だけだもん。」

そう言つと、私達はそれを誓う様に、どちらからともなく唇を重ねた。

暗くなりかけた冬の夕方。私達は手を繋いで、ゆっくりとバス停に続く道を歩いていた。

家を出てからずっと、祥太君は私を見ている。嬉しいけど何だか落ち着かない。

「…どうしたの？」

あまりに気になってその理由を尋ねると、彼は

「その…体大丈夫かなって思つて…。」

と、ちよつと言いにくそうに目を泳がせた。

本当は少し歩きづらい。色んな所が痛くて…。でも

「大丈夫。」

と俯きながら言つと、彼は

「そっか。」

とホツとした様な声を出した。

「…俺、初めてが沙和で良かった。」

呟く様な彼の言葉を聞いて、私は弾かれる様に祥太君を見た。すると彼は恥ずかしそうにして、私から視線を逸らし俯いた。

嬉しかった。私もそう思っていたから。彼も同じ事を思ってくれ

ていたなんて、なんて幸せなんだろう。

「私も。祥太君で良かった。」

そう答えて、それからちよつと恥ずかしかつたけれど

「また…してもいいよ。」

と彼に告げた。

「え…！本当に？」

その言葉に反応して、祥太君が顔を上げた。そして

「じゃあ次までに、色々勉強して来る。」

と言って私を見た。

色々つてなんだろう…と、想像して恥ずかしくなつたけど、それ

よりも『勉強する』という祥太君の言葉が気になつて

「どうやって勉強するの？」

と尋ねると、祥太君は言い淀んで、再び私から視線を逸らした。

「他の女の子と…とか、絶対に嫌だからね！」

「そんな事しねえよ！」

「じゃあ、エッチなビデオとか？それも嫌！」

そりゃあ知識はないよりはあつた方がいいかもしれない。でも例えビデオだつたとしても、他の女の人に教わつてなんて欲しくない。比べられるのも嫌だし、私は私だから。他の人と同じ所もあれば、違う所もある。

現に初めての状況だつて、明日香とも瑞穂とも違つてた。みんながみんな、それぞれだつた。

でもそれでいいんだと思う。みんなが同じ必要なんてない。

祥太君と私、二人で作つていけばいい。

それがやがて私達二人だけの『基準値』になる。

チラツと横を見ると、祥太君はまだ悩んでいた。その姿を見ていたら、何だか男子って可愛いなって思えてきた。

私はキヨロキヨロと辺りを伺って

「ねえ、祥太君。そんなに勉強したいなら二人でしよう。」
と耳元で囁いた。その言葉に驚いて、祥太君が顔を上げる。

その瞬間をばっちり狙って、私は祥太君にチュツとキスをした。

） E n d ）

最終話 好きってこと（後書き）

『二人だけの基準値』を最後まで読んで頂きありがとうございます。『二人だけの基準値』シリーズは全て終了です。ここまで続けられたのは、優しいお言葉を掛けてくださった方々と、この作品を読んで下さった皆様のお陰です。本当にありがとうございます。ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1124h/>

二人だけの基準値

2010年10月8日14時48分発行